職朝での校長挨拶 24

おはようございます。今ヘーゲルの『精神の現象学』の中にある「悪と赦し」の問題をお話ししています。

人間は取り返しのつかない罪を犯した場合、自分の意志では心の底から「ごめんなさい」を言うことはできません。また言ったとしてもそれは相手に赦してもらうことを前提としたものにならざるをえません。結局は自分へのこだわりを抜け出ていません。相手はそれが分かるから、赦すことができない。これが第 1 ラウンドでした。

罪を犯した側は相手の「赦せない」という気持ちの中に自分と同じ「自分へのこだわり」を見て取ります。そうして「お互い悪ではないか。和解し合おうじゃないか」と持ち出します。このように言われ、赦す側は自分のなかに自分へのこだわりがあって赦すことが出来ないことは認めつつも、いよいよ相手を赦すことが出来ない。「とんでもない！」。こうして両者は和解が得られないまま発狂するか消え入るかして人間的には死んでしまいます。これが第 2 ラウンドです。しかしそこに和解の然り（Ja）が立ち上がっている、とヘーゲルは言います。そうしてここで道徳から宗教へと移行します。今日はここまでです。本日もよろしくお願いいたします。